

JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

5期—10号



2003.12.13

CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01

President's Message / Masaru MAENO

2003年次第3回拡大理事会報告(10/4)／山田幸正 02
Reports on the 3rd Meeting of the Executive Board, 2003
Yukimasa YAMADA

ホイアン・フェスティバルと国際シンポジウム／友田博通 05
The Hoi An Festival and International Symposium, Vietnam
Hiromichi TOMODA

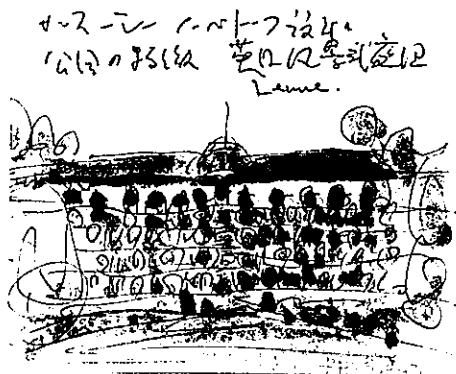
ベトナム・ホイアンの歴史地区の保存と「アジアの歴史地区保存
に関するホイアン宣言」／斎藤英俊 06
Conservation of the Historic District in Hoi An and "the Hoi
An Declaration on Conservation of Historic Districts of Asia"
Hidetoshi SAITO

ホイアン宣言の意義について／西村幸夫 08
Meaning of the Hoi An Declaration / Yukio NISHIMURA

ホイアン宣言によせて／古田元夫 08
On the Hoi An Declaration / Motoo YOSHIDA

お知らせ／山田幸正 09
Announcement / Yukimasa YAMADA

日誌／事務局 10
Diary



イラスト／前野まさる (以下すべて)

はじめに
前野まさる

時のたつのは早いもので、私の3年の任期も終わりに近づきました。週3日恵比寿のイコモスの事務所に通い、我妻さんからイコモス事務の段取りを手取り足取りで教わり、でもなかなか慣れません。本年4月、我妻さんから水口泉さんに交代しました。我妻さんが小一ヶ月かけて、丹念に事務引き継ぎをされましたので、円滑に機能しています。我妻さんには感謝しています。

日本イコモスの事務局は、年4回の理事会、インフォメーション誌発行の準備で年中追いまわられているのが正直なところです。この3年で気がついたことは、230余人をかかえる日本イコモスの運営財政の恒常的危機です。何しろ会費の半額をパリ本部の経費として上納しなければなりません。皆さんのお手元にお送りしているプラスチックのカードはその領収証です。ですから、会費滞納が最も頭の痛いところなのですが、本部事務局を矢野さんの文化財計画協会に同居の上、家賃を免除していただいているので、何とかしのいでいるのです。そんな時、今年の7月杉尾副委員長のお世話で日本コントラブリッジ協会からの寄付金100万円と、矢野事務局長以下会員の皆様のお骨折でいただいた日本ユネスコ協会連盟の原稿料は救いの神でした。感謝いたします。

次に日本イコモスの活性のことがあります。折角イコモス会員になっていただいても、会報以外に何の接触のないことでは、それぞれ文化遺産の保存に関心のある委員諸氏の才が活かされないことになります。イコモス国際委員会でも専門分科委員会(ISC)が中心になって活動していますので、日本イコモスでも、専門分科委員会の活動を会員諸氏に広げ活性していただきたいと、皆さんの関心分野に関するアンケートをお送りし、100余人の方からご返事をいただきました。今後はこのデータに基づいて日本イコモスの活性をはかりたいと思います。

以上、この3年を省みて少々くどくど内幕の悩みを述べ、お目障りかとも思いますが、事情お察しの上、今後の日本イコモスの運営と日本および世界の文化遺産の保存にお力を貸していただきたいと思います。

2003年次第3回理事会（拡大理事会）報告

2003年次第3回理事会（拡大理事会）が去る10月4日（土）午後1時半から5時半まで、東京芸術大学談話室（赤レンガ2階）において開催された。出席者は委員長：前野まさる、顧問：伊藤延男、石井 昭、理事：稲葉信子、上野邦一、岡田保良、田原幸夫、宗田好史、矢野和之、山田幸正、吉田綱市、小委員会主査：藤井恵介の12名で、報告事項・審議事項は以下の通りであった。

報告事項

1) 2003年次第2回拡大理事会報告について

前回拡大理事会の議事内容が前野委員より口頭で報告され、これを確認した。

2) 第14回ICOMOS総会（ジンバブエ）の参加者について

来る10月29日～31日にジンバブエにおいて開催されるICOMOS総会に日本から、伊藤延男、佐々波秀彦、杉尾邦江、西村幸夫、本田智子、前野まさる、渡辺保弘の7名が参加の予定であることが、前野委員長より報告された。

3) ICOMOS会長の来日について

去る8月2日ホテル日航（東京お台場）において、「イラク支援国際会議」のため来日中であったICOMOS会長 Micheal Petzet 氏をむかえて歓迎夕食会が開催された。伊藤延男、市原富士夫、稲葉信子、西村幸夫、前野まさるの各氏がこれに参加した。以上の通り、前野委員長より報告された。

4) 国際専門分科委員会の動向について

(1) Cultural Routes(CIIC)

杉尾邦江委員から以下の通り、文書で報告があった。

CIICは今後3年間の活動プログラムにもとづいて Cultural Routes のチャーターの策定を目指している。そのドラフトの検討、作成を本年の5月から行なって来た。このドラフトは多分2004年までにまとめられ発表される事となろう。従って、これらを更に確実なものとするべくCIICの会長を始めとして12人

のメンバーによるタスクフォースを設置し更に検討を進める事となった。ASIA-PASIFIC地区の代表として筆者も参加する事となっている。来る Victoria Falls での CIIC のミーティングで詳しく論議される事となっている。

CIICは1999年にスペイン・イビザ島で開催されたCIICのセミナー以来 Cultural Routes の定義、概念、適切な解釈をめぐって議論してきた。更に翌年には Intangible Heritage と Cultural Routes との両者の普遍的な脈絡と関係についてスペインのバンプローナでのセミナーで討議・議論を重ねてきた。結果として Cultural Routes は現在文化景観の範疇に含まれ、「Designated long linear area」と位置付けられているのに対して文化景観とは異なった概念のものと定義され、分離の方向をとるに至った。

そこで世界遺産条約の履行指針の見直しと修正の必要が生じ Cultural Routes は文化景観とは別に新しい概念の遺産のジャンルとして独立させるよう指針の修正案の検討と作成を行なってきた。この指針修正のドラフトを少なくとも来年には提出しようとしている。

(2) Vernacular Architecture(CIAV)

来年2004年に日本で開催予定の標記国際専門分科委員会年次会議を、愛媛県が計画している「町並み博覧会」に合わせて開催できないか、現在、文化庁、愛媛県、全国町並み連盟などと協議を行なっていることが、標記委員である前野委員長より報告された。また後に審議事項として協議された。

(3) Earthen Architecture

標記の国際専門分科委員会による公式な国際会議と位置づけられる「TERRA 2003」と称する会議が、来る11月29日～12月2日、イランのヤズドにおいて開催される。この国際会議に、5名の論文発表者を含む合計8名（把握している範囲で）が日本から参加する予定である。以下の通り、標記委員である岡田保良理事より報告された。

5) 国際専門分科委員会に関するアンケート調査について

前野委員長より以下の通り、報告された。

日本イコモス国内委員会の会員全員を対象に行なった「国際専門分科委員会に関するアンケート調査」（8月6日



送付)に対して、現在まで98通の回答はがきが回収された。それらを整理してみると、Historic Garden-Cultural Landscape (16名)、Historic Town and Villages(16名)、Archeological Heritage Management(10名)などを最も関係深い専門分野として選ぶ会員が多くなる反面、Stained Glass、Economy of Conservation、Polar Heritageはまったくいなかった(ただし、これらの分野に関係ありと回答した会員はそれぞれ若干名いる)。偏りが生じることはやむを得ないことではあるが、Risk PreparednessやTrainingなど重要であるにもかかわらず、関係ありとする会員が比較的少ない分野を中心に、今後どのように国際専門分科委員会の活動を強化・活性化していくか幅広い検討が必要であろう。

6) 第5小委員会(プロヴディフ旧市街保存事業協力班)の近況

標記小委員会の石井主査から以下のように報告された。

【現状】 日本ブルガリア両国イコモス国内委員会の共同企画にもとづく「プロヴディフ旧市街保存地区内文化財建造物修復事業」(略称 Ancient Plovdiv Project)が、ユネスコと日本外務省による慎重審査を経て、本年(2003年)7月下旬、「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」(UNESCO/Japan Trust Fund)の供与対象として正式に採択された。現在、Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Groupは、検討を重ねた『設計監理者の任務』『保存修理工事のための指針』『設計監理者と施工業者の選定方法』等を早急に成文化するべく作業を進めている。現地では「プロヴディフ旧市街管理事務所」(Ancient Plovdiv Directorate)が、損傷の激しい建物に対する応急措置を間もなく開始する。

【経過】 本年4月以降の経過を振り返り主な事項を記せば次の通りである。

(1) ユネスコの Lemaistre 氏から Joint WG の Krestev, Staneva 両氏と石井に宛てて4月18日と23日にメールが届いた。「予算総額100万米ドル以内との条件で事業実施が確定した。予算と事業内容の執行案(修正案)を4月29日までに提出して欲しい」との趣旨であった。我々は現地事情、とくに旧市街管理事務所の意向を尊重しつつ、執行案=予算総額999,738米ドル(明細表と説明文を添付)=を

作成し期日までに提出した。また、5月中にも数回にわたり質疑応答の形でユネスコとの協議を続けた。

(2) 降って7月24日、Lemaistre 氏から次のようなメールが届いた。「執行案はユネスコと日本外務省の双方によって承認された。8月26～28日にユネスコ事務局長の一行がブルガリアを公式訪問し資金供与のための調印式に臨む予定である。その準備にイコモス会員諸氏の協力をお願いしたい」との内容であった。以後約1ヵ月間、Krestev, Staneva 両氏が自ら依頼に応じて大いに尽力した。一方、両氏は石井に対し「調印式の折にぜひブルガリアへ来て欲しい」との要望を寄せた。

(3) 調印式は8月27日の午後、プロヴディフ旧市街にある保存家屋(現、民俗誌博物館)において、松浦晃一郎ユネスコ事務局長とSolomon Passy 外務大臣との間で行なわれた。文化大臣、日本国大使、等を含む要人多数が列席し盛会であった。石井は8月25日にブルガリアに着き、上述の式典に参加したほか、その前後に文化省、大統領府、日本大使館、等を訪問した。また、Krestev 氏と共同で「Joint WG 会議」(ソフィア、26日)と「関係機関連絡会議」(プロヴディフ、28日)とを主宰した。両会議とも、目的は事業実施に関わる当面の諸課題について討議することであった。後者には Joint WG のほか、国立文化財研究所、県庁、市役所、旧市街管理事務所、等の各代表が参加した。

【第5小委員会】 本年4月以降、当小委員会は東京で計3回の会議を開いた。第9回(5月12日)。ユネスコおよびブルガリアイコモスとの交信記録を総点検して要点を確認するとともに、成文化が急がれる『設計監理者の任務』について麓委員の手で準備された草案(日本語版)を検討した。第10回(8月15日)。交信記録の点検・確認に次いで、麓・矢野両委員の手で準備された草案(英語版)を検討した。第11回(9月22日)。前回と同じく草案(英語版)を検討した。なお、文書作成の手順について付言すれば、『設計監理者の任務』と『保存修理工事のための指針』は先ず日本側で、また『設計監理者と施工業者の選定方法』は先ずブルガリア側で、それぞれ原案を作り、相互にコメントを求め、しかるのち「Joint WG 会議」において完成させる予定である。

(文責:石井 昭)

7) 京奈和自動車道路建設の問題について

奈良文化財研究所職員組合より「京奈和自動車道の平城宮跡及びその周辺の地下通過計画の撤回を重ねて求める要望書」(8/7付)、第31回古代史サマーセミナー参加者一同より「奈良の文化財に悪影響を与える高速道路計画の再考をもとめる」意見書(8/25付)が日本イコモス国内委員会宛に寄せられたことが前野委員長から報告された。また、7/11付け朝日新聞奈良版および9/24付け朝日新聞関西版の切り抜き記事が紹介され、上野理事からもこの件に関する近況が報告された。

8) 京都・半鐘山開発の問題について

去る7月20日午後、京都半鐘山開発問題に関する見学会および研究会が実施されたが、その後の経過について、宗田理事より以下の通り報告された。

住民による工事差し止め請求がなされ、現在、工事自体は停止されている。また、土木工事を請け負った業者は施工契約を解消したらしい。世界文化遺産のバッファー・ゾーンの問題とは別に、防災などの安全性に問題があるのではないかという指摘があり、本件開発申請とその処理に法的な問題が取りざたされている。

9) 紀伊・熊野古道の世界遺産申請にかかわる審査委員の来日について

日本国政府が紀伊・熊野古道を世界遺産委員会に申請している件に対して、10月11日から19日にかけて韓国イコモス委員長の黄氏が世界遺産審査ミッションで来日される予定である。そこで、前野委員長、杉尾理事、矢野理事が参加して10月18日に彼との会合をもつ予定である。以上の通り、前野委員長より報告された。また、関連して、文化的景観にかかわる法的整備の動きがあることが紹介された。

10) 世界遺産に関する教育教材の完成とその受領について

日本ユネスコ協会連盟からの依頼で制作に協力してきた世界遺産に関する教育教材(インフォメーション誌第5期6号に掲載)がこのたび完成した。日本イコモス国内委員会事務局は、その完成品とともに、協力謝礼50万円を受領した。以

上の通り、矢野理事より報告された。

審議事項

1) 新規入会者の承認

(1) 個人会員

これまで4名の個人会員入会申請があった。審議の結果、うち3名については次回再審議とした。また、残り台湾在住の1名については、規約上、入会は認められなかった。なお、国内委員会のない国の人に対して、パリ本部で直接、入会を受け付けていることを本人に連絡することとした。

2) ジンバブエ総会の諮問委員会委員長および副委員長の選挙とその委任状について

ICOMOS本部事務局より、本年10月28日にヴィクトリア・フォールで開催される諮問委員会の委員長・副委員長の候補としてこれまで4名の立候補があった旨、連絡があった。また、その選挙に対する委任状が送付されてきている。

審議の結果、従来通り、総会参加者をのぞき、本日、出席している理事が委任状に署名することにした。

3) 寄付金の扱いについて

(社)日本コントラクトブリッジ連盟からの寄付金100万円(7月2日に受領)の有効な用途について、矢野事務局長より提議された。審議の結果、何らかの出版物の企画などを含め、前野委員長、矢野事務局長、杉尾理事に一任することとした。

4) 組織・活動と財政の問題について

インフォメーション誌第5期9号に掲載されたUS/ICOMOS委員長に対するインタビュー(福島綾子氏の投稿)について、前野委員長より以下のような指摘がなされた。US/ICOMOSはアメリカ国内の保存関係の団体が多く参加し、その主要な団体の代表者で理事会が構成されていることや、National AffiliatesやInstitutional Memberという独自の会員制度をもっていることなど、特に日本イコモス国内委員会



の活動や財政の面で、参考にすべきことがあるように思われる。

これに対して、石井顧問より以下のような意見があった。数年前にすでにUS/ICOMOSの同様な事情は、理事会において紹介し、あわせてオーストラリア・イコモスも会員規模を大幅に拡張する方向にあることを指摘し、日本イコモス国内委員会を将来的にどのような形態にすべきかを検討した経緯がある。

5) ICOMOS CIAV会議 日本開催について

2004年秋に日本で開催されるICOMOS国際専門分科委員会 Vernacular Architecture (CIAV) の年次会議について、以下のような企画案が前野委員長より示された。

来年のCIAV会議のテーマは、Sustainable Conservation System for the Vernacular Architecture, Traditional Historical Architecture and Villagesである。CIAVの加盟国は現在59カ国、委員は79名で、年次会議への通常の参加は20～35カ国、40名程度だと考えられる。来年、愛媛県が計画している町並み博覧会にあわせる形で9月初旬あるいは10月初旬に開催したい。日本イコモス国内委員会が主催し、愛媛県・全国町並み保存連盟との共催で、文化庁からも支援をいただくことを考えている。

おむね内容において承認されたが、日本イコモス国内委員会ではなく、ICOMOS CIAVを主催とすべきではないか、実施のための経費は相当な額になるのではないかと、運営・事務を外部業者などに委託すべきではないか、などの意見が出された。CIAV委員でもある前野委員長を中心に早急に関係機関・関係者と協議・調整し、具体案の提示を願った。

6) アジア地域会議について

西村本部副会長(当日、欠席)より事前にメールで以下のような提案があった。

来年の7月9日前後に予定されているイコモスのアジア地域の会合において、気候が湿潤で、急速に市街化しつつあるアジア諸都市の保全地区のあり方を考えるといったテーマを提案してはどうでしょうか。先月ベトナムのホイアンで開催された日越国交樹立30周年の記念シンポジウムにおいても、この点を強調したホイアン宣言が採択され、そのフォローアップ

として来年のイコモスアジア地域会議での議論の継続、さらに2年後のイコモス北京総会において、さらなる議論を積み重ねる必要があることが議論されました。これを受けて、日本からこの点に関して論点を整理して、ジンバブエにおける地域会議で問題提起するというのが大切だと思います。

この提案はまったく異論なく、了承された。

7) 日本ルーマニア世界遺産会議 2003 「東欧の中世文化遺産とルーマニアの修道院文化」について

羽生小委員会主査より(当日、欠席)、標記会議の企画書が提出され、後援の依頼があった。

この会議は、ルーマニア文化省、ユネスコ、ルーマニア正教会の主催で、東海大学、慶応義塾大学、東京芸術大学の共催で、本年12月4日～6日に、日本建築学会建築会館や慶応義塾大学三田キャンパスなどで開催される予定である。

審議の結果、標記会議の後援することを承認した。

8) 役員改選について

前野委員長より、次期役員の改選について提議された。

審議の結果、前回改選時に用いた手順・方法を継承するかたちで進めることとし、12月13日の総会までに本件のみを審議するための臨時の理事会を開催し、そこで討議することとした。

(広報担当:山田幸正)

ホイアン・フェスティバルおよび国際シンポジウムの報告 昭和女子大学国際文化研究所 友田博通

本年の正月明けに日本大使館から「ホイアンでも日越国交樹立30周年の記念事業を企画できませんか」というお話をいただき、ホイアン・フェスティバルがスタートした。思えば9月の事業をその年の1月にスタートさせるわけで資金的目途があるはずもない。しかし、ホイアン市やホイアンソサエティ、ホイアンホテルから記念事業をやりたいとの申し入れがあり、ホイアン側は大喜びすると引き受けた。実際、これほどベトナム側が臨時予算を組み自己資金を投入した例を見たことがな

い。

今、ベトナムで資金力があるのはベトナム航空とベトナムTV、ベトナム航空はホイアンへの参加者のために格安チケットを用意、TV局は初日夜8時～10時半、二日目夜8時～9時の2本の生番組を組み、水上ステージ・水上観客席など惜しげもなく会場設営、初日は「世界の国からホイアンへ」、二日目は「ホイアンから世界の国へ」というミュージカルも行った。

日本からは、保存地区内に設営された各会場で、江州音頭・お神輿巡幸・盆踊り、さらに、茶道紹介・緑日・折り紙・団扇づくり・和装紹介などのワークショップ、衣・食・考古学の日越シンポジウム、これらはJICA派遣専門家南雲一郎が現地で指揮をとった。激しい夕立の中で参加者約1万人、日本からも200人以上が参加し、町中は人ごみで歩けないほどの大盛況、SARS騒動の後遺症に苦しむ観光関係者からたいへん感謝された。

幸い文化遺産に関する国際シンポジウムも、その後、文化庁・JICA・ユネスコアジア文化センター・国際交流基金などの協力を得ることができ、ベトナム側はさらにカンナム省・文化情報省・外務省他が参加、ユネスコ・イコモスの国際機関代表、マレーシア（ペナン）・ラオス（ルアンパбан）など周辺国代表も招待できた。日本は、文化庁から文化財部長木曾功・建造物課長谷村勇雅、特別講演として裏千家前家元千玄室「茶の心と世界平和」・近江八幡市長川端五兵衛「死にがいのある町づくり」、早稲田大学中川武「フェの王城」・千葉大学福川裕一「ホイアンの町並み」・日本大学重枝豊「ミーソン遺跡」・都立大学山田幸正「ベトナムの木造民家」などの講演、ベトナムの新たな課題「ハノイ36街区街並み保存」「ドンラム村農村集落保存」「胡朝城址遺跡保存」の報告も含め、アジアの文化遺産の保存問題を議論した（岩波アクティブ新書「ベトナム町並み観光ガイド」参照）。

最後に、ホイアンでの経験をアジアの文化遺産保存に役立てるため「ホイアン宣言」を採択し、盛況のうちに閉幕することができた。

ベトナム・ホイアンの歴史地区の保存と 「アジアの歴史地区保存に関するホイアン宣言」 東京文化財研究所 齋藤英俊

ベトナム中部ホイアン市にある歴史地区は、かつて国際貿易港として繁栄し、16世紀から17世紀にかけては数百人規模の日本人町が形成されていたところで、世界遺産に登録されている。この地区は、1984年3月に公布されたベトナム政府の文化財保護に関する命令に基づいて、1985年3月に国家の文化財として指定されたが、当時のベトナムの経済環境ではその適切な維持・保存は困難で、多くの家屋は放置されたまま、雨漏りによる木部の腐朽や白蟻の被害が進行していた。

1990年3月、ベトナム日本友好協会、ベトナム政府文化情報省、クアンナム・ダナン省人民委員会がダナンにおいて開催した「歴史的町ホイアンに関する国際シンポジウム」のアピールには「ベトナム政府、クアンナム・ダナン省、ホイアンの人々は、文化財の保存に最善を尽くした。しかし、修理や修繕どころか、日常の維持も不可能な状況となっている」と記されている。こうした、状況のなかで、日本と関わりが深いことから、1990年8月にホイアン史跡国家委員会委員長より日本政府文化庁長官宛に、ホイアンの保存に関する技術的・資金的協力の要請が届けられ、これを受けて1992年からホイアンの歴史地区保存に関する協力事業が開始された。

事業は、歴史地区形成等の調査・研究と、保存修復の技術的・資金的支援からなっていた。調査・研究は昭和女子大学国際文化研究所を中心とし、これに千葉大学、東京大学、東京都立大学、東海大学、筑波大学、東京芸術大学の研究者と学生が加わり、ベトナム側からはハノイ大学とハノイ建築大学の研究者と学生が参加した。技術的協力は、文化庁文化財保護部建造物課を中心に、日本建築セミナー、滋賀県・奈良県・和歌山県・文化財建造物保存技術協会の建築家・文化財技術者が加わり、ベトナム側はホイアン遺跡管理事務所職員とベトナム文化財修復センターの技術者が参加した。

事業の初期には、ベトナム側では調査や修理工事、シンポジウム開催のための費用は用意できなかったために、昭和女子大学国際文化研究所が中心となって、文部省科学研



究費を獲得し、私学振興財団、JICA、日本ユネスコ協会連盟をはじめ、各種助成団体、私企業、個人などから寄付を募り、その資金とした。日本側の資金で実施された修理工事は10件に上り、屋根の葺き替え工事は29件に達した。

これらの活動の結果、ホイアンの町が形成されてきた経緯、町屋や会館などの建築的特色と建築年代などが明らかとなり、また、技術協力を通じて、ホイアンの建物の技術的特質、仕口・継手、構法、加工法などの技法が判明した。これらの成果は、報告書や学会論文として、また、数度に及ぶシンポジウムにおいて公表されている。また、修理した町屋1軒を「貿易陶磁博物館」として開設し、ホイアン郊外の水田の中にある「谷弥次郎兵衛」銘の日本人墓の整備も行なった。活動の最も大きな成果は、ホイアンの歴史地区が1999年に世界遺産リストに登録されたことであろう。

ホイアンの歴史地区に関する協力事業の12年間は、ベトナムの経済が飛躍的に発展した時期と重なっている。ホイアンホテルは、1992年には市の人民委員会のゲストハウスであったところで、当時は4、5室しかなかったが、その後、毎年のように新しい施設を増設し、今では250の客室を擁するまでになっている。また、市の統計によれば、1992年に9千人弱であった観光客は、2002年には80万人に上ったという。日本の協力として実施された事業以外に、ホイアン市や個人が独自に行なう修理も増え、放置されて倒壊寸前の家屋や屋根が破れている家屋は見ることはなくなった。既に、ホイアンは自立して独自の歩みを始めている。

1992年には、地元の人を相手に食料品や衣服の仕立てなどを商っている家はわずかで、そのほかの町屋は扉を閉ざし、町は閑散としていたが、現在では、観光客で賑わい、ほとんどの家屋が観光客相手のレストランや絵画、工芸品、衣類などを商う家となっていて、驚くほどの変貌を遂げている。このような急激な発展にもかかわらず、かつて日本で見られたような乱開発による伝統的な町並みの破壊はなく、ホイアンの歴史地区は文化遺産としてよく全体が保存されている。日越の協力事業は時に恵まれ、幸運であったといえる。

日越国交樹立30周年を記念して、各種のイベントや複数のシンポジウムを含む「ホイアン・フェスティバル」が2003年9月にホイアンで開催されたが、これは上記の事業が日越友好の代表的な事業であったと評価されていることを示してい

る。「ホイアン・フェスティバル」の最終日には、「アジアの歴史地区保存に関するホイアン宣言」が採択された。宣言は、この12年間の日越協力事業の成果と課題を踏まえた集大成ともいべきものである。宣言は、ホイアンの歴史地区にみられる様々な特色や課題を共有するアジアの歴史地区の保存に関するものである。その内容を以下に要約する。

1. 数世紀に亘る交流の歴史を示すアジア各地の歴史地区は、現在、様々な理由によってその価値を失いつつある。それを防止するには、ホイアンにおける経験が役立てられる。
2. 歴史地区の保存は、そこに住む人々の理解と協力が必要である。保存には従来からの伝統的な知恵や工夫も重要である。
3. 観光は、地域の経済活動を促し、歴史地区を保存する強い動機となるものであり、文化遺産保存と対立するものではない。歴史地区への観光は異文化の出会いであり、その土地の歴史や文化・芸術を理解する機会をつくる。しかし、文化遺産や周辺環境を損ねないような持続可能な観光開発が重要である。
4. 洪水や火災、事故など、自然と人的な災害から文化遺産を護るためには、危機管理に対する特別な配慮が必要である。
5. 歴史地区にある木造建築は、文化の多様性を示す重要な要素であるが、人口密度が高く、高温多湿な環境での保存は困難を伴う。伝統的な知恵の活用と日常的な管理と修理が肝要である。
6. 歴史地区の保存は、複合的な事業であり、国際的な協力や学際的な専門家の関与を必要としている。

ホイアン宣言の意義について

東京大学 西村幸夫

ホイアン宣言は日越国交30周年を記念して、2003年9月15日にベトナムの古都ホイアンにおいて、集会参加者一同の名において採択されたアジアの歴史地区の保全に関する基本的な方針を謳った宣言である。

高温多湿で地盤が悪く、建築材料に木材が使われることも多いアジアでは、歴史的環境保全の一般的な原則を定めたヴェニス宣言だけでは対応できない場合が少なくない。おまけに人口密度が高く、経済発展が急な地域が多く、生活様式の急速な変化や観光客の急激な増加など、歴史地区を取り巻く社会経済的状況も他地域とは異なっている場合が少なくない。したがって、こうしたアジア地域の歴史地区の今後の保全方針を地域共通の課題として認識することは非常に重要である。

宣言は主に6つの柱からなっている。

第一は、アジアにおいて歴史地区の保全の問題は地域の豊かな歴史や文化を保全するという大きな施策の一環であり、共通の課題として取り組む必要があることである。

第二に、保全の計画立案にあたって住民参加が重要であること、そのための理解を得る努力を行うべきことが述べられている。

第三に、観光を一概に否定するのではなく、質の高い文化観光を文化遺産保全の施策の中に位置づけていくことが重要であると強調している。とりわけ、観光に対する柔軟な姿勢が特徴的であるといえる。

第四に、各種災害に対する対策を計画の中に織り込むことの重要性を述べている。

第五に、木造に関して、その保全施策はその維持管理や構法などに対する十全な理解とその継承など、無形の文化的遺産の保全問題と関わっていることが記されている。

第六に、国際的な協調の必要性が訴えられている。

日本イコモスとしても、来年のアジア地域のイコモスの集会(2004年7月9日、上海の予定)やヴェナキユラー建築の国際専門委員会(ISC)の2004年度会議(2004年10月11日から17日、愛媛県の前定)などにおいて、継続的に

この問題を議論し、2005年のイコモスの北京総会に向けて、議論を深める必要があるといえる。

ホイアン宣言によせて

東京大学教養学部 古田元夫

この間のホイアンにおける町並み保存の経験を総括する今回のシンポジウムが成功し、ホイアン宣言が採択されたことは、1990年のホイアン国際シンポジウム以来、ホイアンをめぐる国際協力に関与してきた日本の一ベトナム研究者としても、喜びにたえない。

このホイアンが港町として大いに発展し日本町もできた、17世紀の日本とベトナムの関係は、その担い手が日本人とベトナム人に限定されていなかったという意味で、きわめて「開かれた関係」だった。

日本とベトナムの貿易量がピークに達するのは、日本の鎖国後のことだった。この日本の鎖国後に、日本とベトナムの貿易をもっぱら担ったのはオランダの東インド会社だった。ベトナム在住経験が豊富な日本人が、このオランダ東インド会社のベトナム現地での代理人になるようなことがあったかと思えば、長崎にいた華人の林喜右衛門がホイアンの日本町の頭領になるということもあった。

私は、この「開かれた関係」ということが、この間のホイアンをめぐる日本の文化庁や昭和女子大学を中心とした協力でも、積極的な意味をもったと思われる。

17世紀に日本町が存在したということは、ホイアンの文化財保存に日本が積極的に関わる上では重要な意味をもったが、関係者は、日本町という要素を強調するあまり、この事業が日本とベトナムだけの閉じた協力事業になってしまうことのないよう、細心の注意を払ってきた。

ホイアンの古い建物の修復への日本の協力も、これらの建物が17世紀の日本町とつながるから協力したのではなく、日本に蓄積された木造建造物の修復技術を活用することが、ベトナム側が希望している建物、町並みの保存に貢献しうると考えたからだった。

ホイアンは、日本町もあったが、日本との貿易を排他的に



していたわけではなく、世界に開かれたベトナムの港として発展した町だった。現在のホイアンの町並みを保存する努力も、世界的な協力で取り組まれるべきものであり、日本はその一員として積極的に協力するべきだというのが、この10数年あまりのベトナムと日本の関係者の基本姿勢であり、そのことはホイアンの価値が広く世界的に認められてユネスコの世界遺産になるうえで非常に効果を発揮したと、私は考える。つまり、ホイアンの町並み保存は、17世紀の日本とベトナムの関係同様、「開かれた協力関係」として展開されたために、大きな成果を得られたということではなからうか。今回のホイアン宣言はその結晶である。

お知らせ

INTERNATIONAL DIALOGUE “TOURISM, CULTURAL DIVERSITY AND SUSTAINABLE DEVELOPMENT”

2003年9月22日 The Institute of Responsible
Tourism (ITR)より

In the frame of the Universal Forum of Cultures Barcelona 2004, the International Dialogue “Tourism, Cultural Diversity and Sustainable Development” will be celebrated. The Forum which will take place in Barcelona (Spain) from May 9th to September 26th 2004, is a world-wide event based on the promotion of the cultures and the arts, designed to improve the living together through the intercultural dialogue and the celebration in general.

The Institute of Responsible Tourism (ITR), an international organisation associated to UNESCO, acts as the Technical Secretariat, collaborating in the direction and organization of the International Dialogue “Tourism, Cultural Diversity and Sustainable Development”, which is to be celebrated from 14th to 16th July 2004.

The Dialogue will be a meeting-point for more than 1.500 leading stakeholders and people interested in the tourist activities, becoming a space dedicated to open debate and free discussion. The main topic areas will revolve around TOURISM and CULTURAL AND NATURAL HERITAGE, Responsible Tourism from the perspective of the TOURIST INDUSTRY and the SUSTAINABLE TOURIST DESTINATIONS. Likewise, other topics will be treated linked to EDUCATION, TRAINING, INTERNATIONAL COOPERA-

TION, NEW TECHNOLOGIES and ETHICS as aspects of a Responsible and Sustainable Tourism, essential to achieve a world in PEACE.

For PREINSCRIPTION in the Dialogue go to Forum website:
<http://www.barcelona2004.org/esp/conoce/programa/dialogos/otras/otrosdialogos22.htm> (Spanish)

<http://www.barcelona2004.org/eng/conoce/programa/dialogos/otras/otrosdialogos22.htm> (English)

. If you wish to receive further information, or make any suggestions, do not hesitate to get in touch with the Technical Secretariat of the Dialogue, of which the

Institute of Responsible Tourism is in charge, via the following e-mail: itr@biospherehotels.org

INTERNATIONAL SCIENTIFIC CONFERENCE THE VENICE CHARTER 1964 - 2004- 2004?

2003年11月14日 ICOMOS Hungaryより

Budapest -Pcs (Hungary), May 22-28, 2004

The Hungarian National Committee of ICOMOS, together with the City of Pecs, the local government of Baranya County, the Ministry of Cultural Heritage and the National Office of Cultural Heritage, is organising an international conference between May 22 and 28, 2004, almost on the same dates the conference in Venice took place 40 years earlier. Its goals are to honour the predecessors and their work and to re-evaluate the Venice Charter in the light of the challenges monument restoration is facing in the 21st century and to seek answers to questions architects and specialists were facing during these four decades.

The conference will start in Budapest and end in the city of Pecs, a vibrant cultural centre in the south of Hungary. Both cities are sites of the world's cultural heritage, thus offering a promising background to the Conference.

The official languages of the Conference are English, French and Hungarian, with simultaneous translation. Abstracts should be submitted no later than 15 February, 2004 to: Hungarian National Committee of ICOMOS, 1535 Budapest, Pf. 721, Hungary. Phone/Fax +36-1-212-7615; Email: secretariat@icomos.hu.

A Provisional Program, Registration Form and other Conference Information is available from the ICOMOS Hungary website (www.icomos.hu).

日誌 事務局

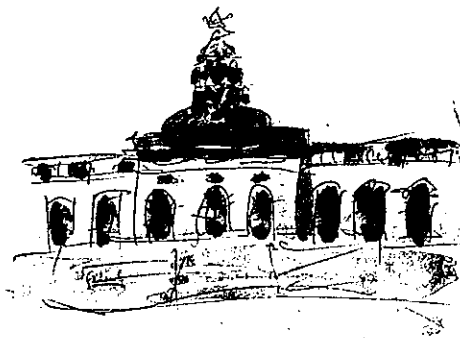
(2003年9月19日～2003年11月17日)



2003年

- 9/19 バリ本部より 世界遺産登録にノミネイトしている「紀伊山地の霊場と参詣道」に対し Keewon Hwang 氏を隊長とする ICOMOS evaluation mission が 10/11～10/19 に来日する旨のメールを受領
- 9/22 第5小委員会開催 (於:文化財保存計画協会 会議室)
- 9/24 福島綾子氏より US/ICOMOS Gustavo Araoz 氏へのインタビュー記事をメールで受領
- 10/1 社団法人 日本ユネスコ協会連盟より 「世界遺産教材」受領
- 10/3 羽生 修二氏より「ルーマニア世界遺産会議 2003」のメール受領
パリ本部より 雑誌「Patrimoine immaterial bulletin hors-serie 2003」を受領
社団法人 日本ユネスコ協会連盟より 新事務局長に 竹尾徳治氏就任の手紙を受領
- 10/4 2003年次 第3回拡大理事会開催 午後1時30分～ (於:東京藝術大学 談話室)
- 10/10 (財)ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所より 「文化財ニュースvol.9」を受領
- 10/11 ICOMOS evaluation mission 来日 Keewon Hwang 氏を招き和歌山県主催による夕食会に前野委員長出席
- 10/12 ICOMOS evaluation mission 現地視察 前野委員長が同行
- 10/17 [JAPAN ICOMOS INFORMATION] 5期9号を発行 維持会員を含む全会員及び関係団体に順次送付
- 10/18 Keewon Hwang 氏を招き文化庁長官主催の昼食会に杉尾福委員長が出席 (於:三井ガーデンホテル「花葵」)
- 10/21-25 オランダ Amerstfoort にて CIAV の会議開催 前野委員長が出席
- 10/22 第5小委員会開催 (於:文化財保存計画協会 会議室)
- 10/27-31 第14回 ICOMOS 総会 (於:ジンバブエ) に前野委員長、西村氏、伊藤氏、杉尾(邦江)氏、渡辺氏、本田氏が出席
- 10/31 社団法人 日本ユネスコ協会連盟より 「世界遺産教材」制作協力費として50万円入金有り
- 11/5 羽生修二氏より 日本ルーマニア世界遺産会議2003(ルーマニアにおける修道院文化の保存修復に関する国際会議)「東欧の中世文化遺産とルーマニアの修道院文化」の案内を受領
(社)日本ユネスコ協会連盟より ユネスコ 2003. 11. vol. 1088を受領
- 11/7 昭和女子大学国際文化研究所より 「The HOIAN DECLARATION」のリーフレットを受領
- 11/16 第5小委員会開催 (於:文化財保存計画協会 会議室)
- 11/17 US/ICOMOS より newsletter no. 3— third quarter of 2003を受領

つくとく文化財保存



●日本イコモス国内委員会 理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野 まさる	Masaru MAENO
Trustees	理事	稲葉 信子	Nobuko INABA
		上野 邦一	Kunikazu UENO
		岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
		杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
		田中 哲雄	Tetsuo TANAKA
		田原 幸夫	Yukio TAHARA
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		藤本 強	Tsuyoshi FUJIMOTO
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA
		町田 章	Akira MACHIDA
		宮川 朝一	Asaichi MIYAKAWA
		宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
		矢野 和之	Kazuyuki YANO
		山田 幸正	Yukimasa YAMADA
吉田 綱市	Koichi YOSHIDA		
Auditors	監事	石澤 良昭	Yoshiaki ISHIZAWA
		木原 啓吉	Keikichi KIHARA
Advisors	顧問	石井 昭	Akira ISHII
		伊藤 延男	Nobuo ITO
		坪井 清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs	主査	藤井 恵介	Keisuke FUJII
		羽生 修二	Shuji HANYU
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
		石井 昭	Akira ISHII

●国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVE TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Vice President	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	前野 まさる	Masaru MAENO
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野 昭	Akira ONO
Structures	岸本 雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
Historic Towns and Villages	坂本 功	Isao SAKAMOTO
	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
Underwater Cultural Heritage Training	上野 邦一	Kunikazu UENO
	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
Historic Gardens and Cultural Landscape	稲葉 信子	Nobuko INABA
	工俣 善通	Yoshimichi KURAKU
Vernacular Architecture	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中 眞	Makoto MOTONAKA
Wood	前野 まさる	Masaru MAENO
	大野 敏	Satoshi OHNO
Earthen Architecture	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤 延男	Nobuo ITO
Cultural Tourism	渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Legal Issues	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
	石井 昭	Akira ISHII
Photogrammetry	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Cultural Routes	西村 康	Yasushi NISHIMURA
Stone	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
Risk Preparedness	西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
	益田 兼房	Kanefusa MASUDA



JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.5, No.10 13 DECEMBER 2003

日本イコモス国内委員会 委員長 前野まさる

事務局担当理事 矢野和之 編集 山田幸正

〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-9-6 アストウルビル3階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel & Fax .03-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp

JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Planning Institute for the Conservation of Cultural Properties

Asutouru Bldg.,1-9-6 Ebisu-nishi Shibuyaku Tokyo 150-0021, Japan

Tel & Fax .+81-3-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp